

巻頭言 「恥の多い生涯」

宇野 元

「恥の多い生涯を送って来ました」(『人間失格』)。キリスト教会の教師たちが、自分の恥を隠そうとせず、大胆に告白しているのは興味深いことです。16世紀の改革者ジャン・カルヴァンは、鋭い顔の肖像画の影響も多分にあるでしょう、冷たい印象が伴いますが、臨終の言葉には彼の心があふれています。ベッドのまわりに集まっている弟子たちに、彼はこう言いました。私がときおり気難しかったことをどうか許してくれと。カール・バルトの神学は、神の恵みをできるかぎり明晰に証ししようとするものですが、それは同時に、自らの恥を語ります。バルトは晩年、刑務所のチャペル奉仕を喜んで担いました。そのなかで、罪を犯した人々に向かって、次のように自己紹介をしています。「私は12年、牧師でした。それから40年、神学の教師でした。けれども、繰り返しこんなふうに思う数時間、数日、数週を過ごしてきました。今も、しょっちゅう過ごしています。神様に捨てられた、と思うときを。」

別の、教会の礼拝でなされた説教では、聴衆を巻き込んで「私たち大罪人」「大罪人である私たち」と、まるで胸をたたく徴税人のように、なんどもくりかえします。そして、大罪人ダビデとともに神の前に立つのを恥じないようにしよう、大罪人ダビデも、大罪人の私たちも、イエス・キリストの苦難によって支えられている、と語ります。

イエス・キリストの苦難。それこそ、恥の最大のものでしょう。イエスが担った十字架は、肉体に苦痛を与えるとともに、無残な姿を容赦なく人前に示すものでした。そのありさまを、福音書は歯に衣着せず、リアリズムに徹した筆づかいで伝えます。

そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスをののしって言った。「おやおや、神殿を打ち倒し、三日で建てる者、十字架から降りて自分を救ってみろ。」同じように、祭司長たちも律法学者たちと一緒にあって、代わる代わるイエスを侮辱して言った。「他人は救ったのに、自分は救えない。メシア、イスラエルの王、今すぐ十字架から降りるがいい。それを見たら、信じてやろう。」一緒に十字架につけられた者たちも、イエスをののしった。(マルコ 15, 29-32)

なぜ、これほどまでに？ 恥は隠すべきものではないのか？ 恥が晒されています。私たちは静かに語りかけられます、あなたの恥を覆うためであったと。